敵と味方Ⅱ

1

萠黄は膝のバッグを両手でぎゅっと握った。そうでもしないと自分の魂がどこか遠くに飛んでいってしまうとでもいうように。

萠黄の右側わずか拳三つ分の距離に腰掛けた憧れの人、揣摩太郎（しまたろう）。彼は胸元から煙草を取り出してくわえると、流れるような動作で火をつけた。

煙が萠黄のところに流れてくる。口を押さえるより先にゲホゲホッと咳が出た。

「あぁ、煙、苦手？　ごめんごめん」

揣摩はくわえて間もない煙草を、足許に敷き詰められた石畳で軽くもみ消すと、少し離れた灰皿スタンドめがけてポイッと投げた。吸い殻は見事その中に飛び込んだ。

「す、すみません」

激しく頭を下げる萠黄。

「なあに、いいよ。最近本数が増え過ぎてるんでマネージャーにも減らせって言われてたしね」

彼のヘビースモーカー振りは、萠黄も小耳にはさんだ

ことがある。たしかネットのジャニーズ関連の掲示板で。
萠黄は生まれつき煙草の煙が体質に合わない。小学校の遠足の時だったか、列車の喫煙席に迷い込み、ひどい痙攣(けいれん)を起こして倒れたことがある。
石畳の上に付いた黒い消しカスを見ながら、神経質な彼女はさらに考えてしまう。もし灰皿が見あたらなかったら彼はどうしたろう。地べたにポイ捨てしたかな？
憧れの人にはそんなことしてほしくない。だから逢いたいなんて本気で思ったことはない。逢うとイメージが壊れるのが怖かったから。
それだけの理由でダ・ヴィンチのコンサートすら行ったことがないのに。
「あの、どうしてわたしの名前をご存じなんですか？」
萠黄は震える唇を精一杯広げて話しかけた。それでも出てきた声は蚊の鳴くような声だった。
揣摩の答えは明快だった。
「さっきキミ、教務課に行っただろ。すぐ後に受付に顔を出したら、キミの登録カードが見えたんでね」
なんだ。判ってしまえば他愛もない。
「それで君に学内を案内してもらおうかと思って追いかけてきたのさ。暇そうだったし」
萠黄の顔にまた血が上った。観察されてたんだ。
「で、でも――」

「どうしてアイドルの俺がここにいるのか、かい？　じつは今年の春から東京を離れて、神戸に住んでるんだ」
「知ってます」だってファンだから。
「へえ、うれしいな。――とにかくあわただしい東京を離れたい一心だったんだ。昨年はコンサートと大河ドラマを同時にやったんで、身も心もくたくたになったし。このままじゃいずれ燃え尽きてしまう、東京にいたら仕事仕事で自分を見失ってしまう。そう考え始めて悩み始めて、気がついたら関西にいたってわけ。北海道出身の俺なのに、なんとなく肌が合ったしね」
「あ……このたびは……ご愁傷様です」
揣摩太郎は、あの消失事件で実家の両親を失っている。
「ありがと。まあそれで住む場所を変えたら、今度は向学心みたいなものが湧いてきてね。俺、高卒だからこの際、大学で勉強してみようかって思ったわけ。それで今日こうして下見に来たんだ。ご理解いただけたかな」
「ハ……ハイ」
さっきから揣摩は何度か萠黄に顔を向けているのだが、萠黄の方は銅像のように固まったまま、一度も揣摩を見ていない。もし視線が絡んだりしたら失神する可能性があるし。
それにしても、なんて偶然、いや幸運。ずっとファンだった人がたまたま同じ日に同じ場所にいるなんて。ま

してや同じ大学で勉強――ええっ、同級生になる!?
「ねえキミ、萠黄さん。よかったら本当にキャンパスの中を案内してくれないかな？」
言いながら揣摩は立ち上がった。
「わた、わたしで、いいん、ですか？」
萠黄は息も絶え絶えである。
「ああ、キミにお願いしたいんだよ。どうせならキミみたいなカワイイ女の子にお相手してもらいたいからね」
揣摩の甘い言葉は呪文のように萠黄の心を溶かした。熱を帯びた顔を上げた萠黄は、初めて揣摩の視線をまともに浴びた。揣摩の微笑みはポスターの数百倍、魅力的だった。
これは夢？
いいえ夢でもいい。十九年生きてきて今日が人生最高の日やわ。人生のどんでん返しってあんねんね。それで世界がひっくり返ったんやわ。よく判んないけどきっとそうよ。きっと――。
揣摩に促されて立ち上がった萠黄は、おぼつかない足取りのまま、いっしょに並んで歩き出した。
その直前、揣摩は萠黄には見えないように、ベンチに落ちていた彼女の髪の毛を一本つまみあげた。そして素早くハンカチに包むと、さりげない仕草でポケットにしまった。

2

揣摩と肩を並べてキャンパスを歩いている間じゅう、萠黄は天にも昇るような気持だった。揣摩はサングラスをかけていたが、それでも正体を隠しきれず、女子学生の一団が遠巻きにぞろぞろ付いてきた。

それでも視察は順調で、とある部屋をのぞき込んだ揣摩は、

「ここは版画を刷る部屋かな」

「……そうみたいですね」

萠黄はガイド役にはまったく不向きだった。学校の仕組みを把握していない休みがちの一年生には当然の話。それでも揣摩は文句ひとつ口にせず、萠黄を帯同させた。途中何度か携帯で仕事の打ち合わせを行い、寄ってきたマネージャーにポケットのハンカチを交換させた以外は、少しも芸能人らしい素振りを見せなかった。

近所の喫茶店で軽く昼食を済ませ、ふたりは情報処理教育棟にやってきた。一階のロビーはインターネットカフェになっていて、学生たちが新種のＰＡＩのダウンロードや、ＰＡＩの助けを借りた情報検索などを楽しんでいた。

「いい大学だね。これからの学生生活が楽しみだよ」
「気に入ってもらえて、うれしいです」
萠黄はすっかりうち解けた気分になっていた。会ったばかりの、それも異性とこんなに長時間いっしょにいたなんて前代未聞だ。驚天動地だ。天下の一大事だ。
「すっかりお世話になったね」
「いえ、そんな……」
「あのさ、このあと時間ある？」
わわ――これってナンパ？　それとも考えすぎ？
あります、と即答するのもミーハーっぽいかな。
とにかく一拍おいて心臓の動悸を落ち着けないと。

《……現場は奈良市、富雄駅のそばで……》

萠黄の思考は寸断された。目が声のほうを向く。
ロビーの壁面には大型液晶テレビが設置されていて、たいていはＮＨＫが流れている。今そこにはＬＩＶＥの文字と、割れたガラス窓からたなびく灰色の煙が大写しになっていた。
いやな予感がする。
萠黄は揣摩がいることも忘れ、テレビの前に近づいた。
映像は切り替わり、マンションの全景が映し出された。
「あぁっ」

左右反対でも自分の住んでいる建物ぐらいは判る。でも煙が出ているのは――。

《六一一号室とのことです》

ふいに足許の床が抜け、支えを失った萠黄は身体をぐらつかせた。

帰らなきゃ。帰らなきゃ。

ふらふらと出口に向かった彼女の手を揣摩がつかんだ。

「どこ行くの？」

萠黄は揣摩がいたことに今気づいたように顔を上げ、

「あのニュースに映ってるの、ウチなんです！」

「な――」

「すいません。わたし、これで失礼します」

深々とお辞儀をし、またすぐ出口に向かおうとしたが、揣摩は彼女の腕を離さない。

「ダメだ」

「ダメって――」

「今あそこへ行くのは危険だ」

「危……険」

萠黄は揣摩の顔を見上げた。揣摩はわずかに顔をそむける。

「何かご存じなんですか？」

「いや、まさか……」
「それなら行かせてください」
「おウチには誰かいるのか？」
「猫のウィルが……」
「ご家族のかたは？」
揣摩はサングラスをはずした。途端に周囲で黄色い声があがる。揣摩太郎よ！
「今日は――あっ、母さんのパートがお昼までの日だ。そんな、どうしよう、もしあの煙の中にいたら……」
萠黄は腰から力が抜け、その場にしゃがみこんだ。
揣摩はしばらく足踏みをして何ごとか思案していたが、やがて決心したように、
「判った。それじゃ俺の車で行こう。電車よりは速い。さあ立つんだ」
「は、はい」
揣摩は携帯でマネージャーにすぐ来るように命じると、萠黄を促して、建物の外に飛び出した。

3

顔も体型も丸々としたマネージャー柳瀬忠夫は、ベンツの運転席でふたりの到着を待ち構えていた。
「柳瀬、奈良に行ってくれ」

「あれ？　タロちゃん、洲本じゃないの？」
「予定変更だ。全速力で頼む！」
萠黄が後部座席のドアを閉めると、揣摩はＧＯと叫んだ。ベンツはタイヤをきしませながら駐車場を後にし、校門から公道に出ると、北に向かってスピードをあげた。
カーナビユニットには携帯がはめ込んである。その液晶画面には柳瀬のＰＡＩ、マリリン・モンローが浮き上がっていて、《第二阪奈道路がお奨めよ～♡》と彼にウインクを投げていた。
しばらく走ると、車はマリリンの指示通りに右折して第二阪奈の高架に乗った。ここから萠黄の家の近所までは一直線だ。
――むんに連絡取れなかったな。携帯がないと電話番号も判らない。帰りにむんのバイト先に寄るつもりだったのに……。
「結果、出たか？」
助手席の揣摩が柳瀬に訊ねる。
「さっきの髪の毛」
「ああ」
柳瀬はチラとバックミラーに視線を投げると、
「出てるよ、クロだった。間違いなくリアルさんね」
揣摩は黙ってうなずいた。

時速百五十キロで生駒山のトンネルを抜け、中山インターで高速を降りると、北の空にヘリコプターが飛んでいるのが見えた。

《三つ目の信号を左ヨ〜ン♡》

ベンツは赤信号を次々と突破していく。自宅はもう目の前だ。大学を出てから二十分。電車なら一時間あまりの距離だ。

「あれだな」

ぐんぐんマンションが近づいてくる。萠黄は喉が乾ききって声も出せない。

付近はおびただしい数の車で埋め尽くされていた。どれも警察車輛やテレビ局のワンボックスカーばかりだ。

萠黄と揣摩は少し手前でベンツを降りると、あらためてマンションを仰ぎ見た。

「君んチに間違いない？」

六一一号室の前で制服姿がうごめいているのが、ここからよく見える。萠黄は真っ青な顔でうなずき返した。

「よし。行ってみよう」

再びサングラスをかけた揣摩に手を取られ、ふたりは野次馬の集団をかいくぐって、どうにかエントランスにたどり着いた。

出入りをチェックしていた警官に、煙の出ている部屋の住人であることを告げると、警官はすぐ上と連絡をつ

け、ふたりを連れてエレベータに乗り込んだ。
六階で降りると、すぐに煙のにおいが鼻を突いた。共用廊下と階段の間をさまざまな服装の人間が行き来している。
「警部、お連れしました」
呼ばれて振り返った男は、五十がらみの叩き上げの警官といった風采の男で、白髪交じりの髪の下から、鋭い眼を萠黄に向けてきた。
「ここの娘さん？」
「……はい。光嶋萠黄といいます……あの、何があったんでしょうか？」
「一時間ほど前、この部屋で大きな破裂音がしました。しばらくすると割れた窓から煙が吹き出てきたと通報があったんですよ。駆けつけると、部屋の中は煙が充満していまして、中では景子さん――あなたのお母様ですかな？」
「は、はい」
「怪我をしたお母様が倒れておられました」
萠黄はショックで口を覆った。寄り添っていた揣摩が前に進み出て、
「お母さんは、どこの病院に運ばれたんですか？」
「君は？」
「あ――萠黄さんの友人です」

警部は揣摩のサングラスを胡散臭げに見つめていたが、
「いや、まだ部屋におられる」
「まだ？　どうして」
警部は揣摩の問いかけに応えず、萠黄に視線を戻し、
「いいかな。冷静に聞いてほしいんだが、あなたのお母様は、その――ちょっと運び出せない状態でね」
「そんなに……良くないんですか？」
「いや――うまく説明できないんだが」
警部は深いしわの刻まれた顔を奇妙にゆがめた。
「会わせてください！」
萠黄は必死の形相で警部に詰め寄った。

4

「まあ待ちなさい。まだ鑑識も済んどらんから不用意に入ってもろたら困るんや」
警部は背後で現場を指揮している若い刑事に声をかけた。
「中に尋ねてくれ。娘さんが帰ってきたんで、会わせてあげられるかどうかて」
若い刑事はすぐに室内へと消えた。普段なら玄関から奥まで見通せるはずなのに、ごった返す人たちでひしめいていて、母がどこにいるのか判らなかった。

ごった返しているのは萠黄らのいる共用廊下も同じだ。警部はじゃまにならないよう、ふたりを階段とは反対の奥まったほうに連れて行った。

「煙はガス爆発のせいですか？」

黙って待つのに耐えきれなくなった揣摩が警部に訊ねた。警部は「違う」とすぐに否定したが、関係者でない揣摩に説明するのに抵抗を感じたらしく、萠黄に向かって語りかけた。

「爆発やなかったんですよ。煙の元は賊（ゾク）の放ったスモーク弾のようなものでした。ここの住民の目撃談によると、テロリストみたいに武装した五人組がこの家を襲撃したらしい。侵入口はバルコニーで屋上から降りてきたようです。バルコニーに面したガラスが割られていました。家の中にはあなたのお母様が居合わせ、大声を出されたので、お母様に向けてスモーク弾を放って逃げた」

その時、けたたましい音をたてて、新聞社のヘリが頭上を通り過ぎていった。他にも数機が見え隠れする。警部は空に向かって舌打ちしながら、

「煙の量が多かったんでマスコミの連中は爆発と早合点しよった。そのうえ妙な侵入者という話を聞きかじって勝手に騒いどるんですよ」

「賊の目的は何だったんですか？」

揣摩がもっともな質問を投げかけた。

「それが皆目検討もつかん。武装した人間が徒党を組んで、なぜ六階にあるこの部屋を狙ったのか。部屋の中には物色した痕もない。今の段階では不明だ」
そう言うと警部は腰を少しかがめて、萠黄の顔をのぞきこんだ。
「お嬢さん。あんたに心当たりはありまへんか？」
萠黄は首を左右に振った。警部はさらに問うた。
「お父さんはどちらにお勤めですか？」
「父はおりません」
萠黄はきっぱりと言った。
「失礼。そうでしたか」
その時、鑑識課員たちを押しのけるようにして、さきほど若い刑事が飛び出してきた。彼は廊下の隅に倒れるようにうずくまると、激しく嘔吐（おうと）した。
「……ひどすぎる！」
刑事の言葉を聞くと、萠黄はダッと身体をひるがえし、玄関へと飛び込んだ。虚を突かれた警部は止める暇もなかった。
「萠黄さん！」
揣摩も後を追おうとしたが、警部に肩をつかまれて制止させられた。
「君の名前を聞いとらんかったな」
「僕を知らないんですか。揣摩太郎ですよ」

「人と話すときはサングラスぐらい取るもんや」

萠黄がリビングの入口に現れたとき、周囲の人たちはようやく彼女に気がついた。鑑識課員たちが手を止めて見守るなか、萠黄は母の枕元に一歩一歩近づいていった。

バルコニーの割れたガラスには幅広のブルーシートが張られている。ヘリからの目隠し対策も兼ねているのだろうが、そのせいで部屋の中は電灯がついているにもかかわらず薄暗い。

「お母さん……」

萠黄の母は割れたガラス戸のそばに横たわっていた。胸のあたりから爪先まで白い布ですっぽり覆われている。布の下からは何本ものチューブや電極線がそばに置かれた機械に伸びていて、ピッピッと電子音をたてている。母の口許にかぶせられたマスクが、曇ったり晴れたりをゆっくりと繰り返している。

萠黄は母の姿を目の当たりにして、悲しみではなく怒りがこみ上げてくるのを感じた。萠黄は、沈痛な面もちで機械を操作している白衣の医師に向かって叫んだ。人一倍の人見知りを自称する萠黄には珍しい行動だ。

「どうして母をベッドに上げてくれないんですか！」

母はフローリングの床の上に、おそらくは倒れたときのまま寝かされていた。医師の脇には持ち込まれた折り

畳みベッドが見える。なぜ使わない？
医師は困惑の表情を浮かべた。ちょうどそこに警部が駆け込んできたので、彼はすがる思いで視線を警部に向けた。玄関からは「手を離せ。なんで俺を入れないんだよ」という揣摩の声が聞こえる。
「お嬢さん、さっきも申し上げたとおり、お母さんは動かせない容態なんです」
「でもせめてベッドに」
「それが無理なんですわ」
警部はしかたがないという顔つきで医師に目顔で合図した。医師はため息をつくと、母を覆っている布をおずおずと持ち上げた。
「うぐ――」
萠黄は口許を押さえて一歩後ずさった。さきほどの若い刑事の反応は決して大げさではなかったのだ。

5

めくられた布の下、あるはずの場所には右足がなく、左足は膝から下がなかった。
周囲から急速に音が失われていった。
萠黄は見たものを信じることができなかった。現実感がなかった。世界が裏返ってからこのかた、夢の中にい

るような心持ちの彼女にとって、今ほど現実感が乏しく感じられたことはなかった。
――足はどこ？
「お嬢さん！」
鋭い声が萠黄を正気に戻した。ふらついた萠黄の肩を警部が後ろから支えた。
「すみません。大丈夫です」
警部が手を離すと、萠黄はゆっくりと前に進み、母親のそばに両膝をついた。
医師が布を元通りに掛けようとしたので、萠黄は待ってと頼んだ。
「よく、見せてください」
医師はため息をつくと、そのまま引き下がった。
本当は見たくなんかない。
怖くてしょうがない。逃げたくてしょうがない。でも逃げ場なんてどこにもない……。
「賊のスモーク弾が、お母さんの足を直撃したんです」
腰をかがめた警部が説明した。
母は上下とも下着だけにされていて、怪我をした部位がよく見えた。
萠黄は不審に思った。どうして包帯すら巻かれてないのか。しかし答えはすぐに判った。
母の身体は、足の付け根から土気色に変色していた。

そして驚くべきことに、萠黄が見ている間にも肌の質感を失った身体がボロボロと床にこぼれ落ちていく。まるで砂浜で作ったお城が、波にさらわれて崩れていくように。血が流れ出さないのは同じように砂状化してしまったからだ。

萠黄は医師に顔を向けた。

「お願い。お母さんを助けて！」

しかし医師は目を閉じて首を左右に振った。

「そんな！　お母さん、どうなるの？」

「……もえ、ぎ」

萠黄はハッとなって振り向いた。母の目がわずかに開いていた。

「お母さん、わたしが判る？」

萠黄はすぐに母親の口を覆うマスクに手をかけたが、医師があわてて止めた。

「待って。慎重に外さないと危険です」

医師がていねいに取り外すと、景子は咳き込んだが、すぐに目をしっかりと開いて、

「あらあら……萠黄。あんたもう帰ってきたんやね……。学校には……ちゃんと行ったん？」

「わたし――行ったよ」

「ほならええけど……留年なんかしたらあかんで。学費かかるんやから」

「お母さん――そんなことより、今日は大変やったんでしょ？　泥棒が入ったって」
「……そやそや……なんか映画の撮影みたいに屋上からロープ垂らして降りてきたんよ。……窓ガラスを簡単に割って入ってきてな……〝おまえは光嶋萠黄か？〟て、いきなり訊ねよってん」
萠黄の後ろにいた警部が「何やて？」と声を上げた。
景子は話し続けた。
「……理由は判らへんけど、この連中は萠黄を誘拐しよと思てるんやなて気づいたわ。でもわたしと間違えるなんてな。よお知らんみたいやった……で、わたし言うたったわ。〝そうや。わたしが萠黄やけどアンタら誰や！〟て。……そしたら後ろから羽交い締めにされてしもて、無理矢理わたしの髪の毛を一本取ってな……なんか小さい機械にはさんで。しばらくしたらブーって音がして。〝違う。萠黄じゃない〟てバレてしもた。……他の連中は、あちこち部屋を覗いてたけど、あんたがおらへんと知って、そんなバカな、て言うてた。で、わたし大声で〝ドロボー〟て叫んだったんよ。窓が割れてるから外に聞こえたやろね。連中は泡食って逃げ出しよったわ。それで追いかけたらヘンな鉄砲に足を撃たれて……萠黄、その人、誰？」
「この人はお医者さんや。白衣着てはるやろ？　お母さ

んの身体を心配してくれてはんねん」
「ほんまに？　……わたしやっぱり怪我したん？」
その時どさっと大きな音がした。顔を向けた萠黄は息を飲んだ。すでに景子の身体の変色は下腹部にまで達しており、尻のあたりが大きな固まりになって、こそげ落ちたのだ。
「ううん、大したことないって」
萠黄は景子の手のひらを両手で包むようにして持ち上げた。景子はホッとした表情で我が子を見上げた。
「萠黄……あんた今日はいつもと顔が違うねえ」
そうなのだ。母親からすれば萠黄の顔は左右反対。そして萠黄にしても母景子の顔は知っているものと微妙に異なっていた。
「そお？」
「ウン……なんかオトナっぽいわ……もうすぐ成人やもんね。いっぱい恋せなあかんよ」
「お母さん、ナニ言うの。恥ずかしい」
リビングの入口で騒々しい声がした。振り向くと揣摩が刑事ともみあっていた。
「あらあらまあ……もしかして萠黄のカレ氏？　ちょっとエエ男やないの」
警部が無言で合図すると、揣摩を押さえていた若い刑事は手を離した。

萠黄は作り笑いを浮かべながら、
「わたしも年頃やからね。こう見えてもモテるんよ」
「そうか。安心したなあ」
そう言うと景子は力なく吐息を漏らした。
「なんか眠たぁなってきたわ」
「疲れたんよ。ゆっくり寝て」
「ウン、そうするわ……おやすみ」
「おやすみ」
景子はしばらく寝息を立てていたが、五分もしないうちに静かになり呼吸が停止した。医師の見ていた機械はピーッと持続音を鳴らすと、画面にフラットラインを映し出した。

6

母の遺体には頭の上まで布がかぶせられた。
萠黄は警部に伴われて、隣りの和室へと移った。リビングを出るとき、部屋の隅に小さく盛り上がる砂山があることに気がついた。砂には千切ったような茶色い毛玉がいくつも混じっていた。
間違いなくウィルの亡骸(なきがら)だった。
警部はリビングとの境の引き戸を閉じると、御愁傷様ですと言い、さらに失礼と付け加えて畳の上に腰を下ろ

した。萠黄も警部の対面に膝をそろえて座った。
「こんな時に済まないが――」
「どうして母は〝砂〟になったんですか？」
萠黄は畳に目を落としたまま、抑揚のない声で質問をぶつけた。
警部は口をつぐんだ。そして腕組みをすると、天井の木目をじいっと睨んだ。
「うちの猫も隅っこで砂になってました」
「ああ」
「……犯人のスモーク弾のせいですか？」
「いや、関係ない」
「じゃあ」
「その話はまた後日にしましょう」警部はぴしりと膝を叩いて立ち上がりかけた。「申し訳ないけど、これから署までご足労願えますかな？」
「――救急車」
「えっ」
「昨日から救急車の出動回数が激増してる理由って、これなんでしょう？」
「……」
「秘密なんですよね、一般大衆が騒ぎ出さないように」
片膝の姿勢のまま、警部は唇を歪めた。
「一般大衆って、アンタ、大仰な物言いやな」

「インターネットの裏世界では、もうかなり情報交換がなされてますよ。警察が否定するのなら、外に集まってるマスコミのかたにお話しします。今日ここであったことや見たことを全部」
警部は口を真一文字にして、萠黄の顔に鋭い視線を注いだ。
萠黄は警部のくたびれたネクタイの先端に心を集中していた。人見知りのわたしが警察の偉いさん相手にカマをかけたのだ。やるならトコトンやらないと。
むんならこんな時でも毅然とした態度で臨むことだろう。できるならむんになりたい。
「――萠黄さん」
警部は呼び方を変えた。
「お話したら、アンタ、秘密を守ってくれますかな？」
「ハ、ハイ」殊勝にうなずいてみせる。
警部は座り直した。煙草を吸いたそうな素振りを一瞬見せたが、あきらめたようだった。
「救急車の話、アンタが指摘したとおりや。昨日の朝から休む暇もないぐらい走り回っとる。ご指摘のとおり、〝人体砂状化〟現象のせいでな」
「すなじょうか……」
「確かな情報によれば、日本だけやのうて世界規模で起きてる現象らしい」

「……いつから」
「やっぱり昨日の朝から一斉に。まさに珍現象、いや」
チラと萠黄を見て「怪現象やな」
「怪我をしたら、傷口から砂になっていく――」
「転んで擦りむく程度なら大丈夫やけど、大怪我するとほぼ確実にアカンらしい」
萠黄の脳裏にさっき見た母の足がよみがえった。
「医療現場では絵に描いたようなパニックが起こっとる。そりゃそうや、治療しようっちゅう目の前でホラー映画みたいなことが起こるんや。今朝、全国の病院や警察、消防署なんかに対して政府からの通達があって、現場は冷静に対処するようって言われたけど、原因も判らんのに冷静でおれるか！」
吐き捨てるように警部は言い放った。
「判らないんですか」
「ああ。伝染病の噂もあったけど、世界同時多発で発病するっちゅーのもヘンな話やろ」
それじゃまるでコンピュータウイルスだ。
萠黄はうつむいた。そんな彼女のつむじを見下ろしながら警部は口調をやわらげて、
「――そんなことより、いま問題なんはアンタの身柄の安全や」
「えっ」

「えっ、やあらへんがな。お母さんの最期の言葉聞いたやろ。侵入した賊の狙いはアンタやねんで」
自分がネラワレテイル。わたしみたいな平凡な一市民が、ひ弱な一女性が、なぜ？
「なんで狙われとんのか、心当たりはありまっか？」
「……まったくありません」
「まあ、つづきの話は署でうかがいましょう。ここじゃアンタの身の安全も保証でけへんしな」
萠黄は警部といっしょに腰を上げた。
「あの、警部さん……生意気言ってすみませんでした」
「なんのなんの。どうってことあらへんよ」
和室を出ると、鑑識の作業はあらかた済んだらしく、人影もまばらで、家の中は静けさを取り戻していた。
リビングの端には、布をかぶった母の遺体が、同じ場所にそのまま安置されていた。
布のふくらみを見つめていた萠黄は――
「もう一度、お母さんの顔が見たい」

7

最後にひと目、母の顔を、と言われて警部はしぶしぶ承知した。
警部が砂状化した人体を目撃したのはこれまでに三件。

いずれも取り乱す家族を鎮めるのに大層苦労した。バイク事故で重傷を負った孫が徐々に砂になっていく姿を見て、心臓発作を起こした老人もいた。誰だってあんなものを見せられたらおかしくもなる。

萠黄というこの娘はどうか。一見、ひ弱ではかなげな印象を受けるが、話している彼女からは、なにやら熱気のようなものを感じた。

この娘は悲しんでいるのではない。怒っているのだ。

布の端を両手でつまみ上げると、母の顔はわずかに微笑んでいた。

時刻は夕方にさしかかる頃。外はすっかり雲が広がっていて、室内はますます陰鬱な色を深めていた。

母は美しい――そう思った。肌はすでに塗り固めた砂と化していて、まるで精巧に作られた人形のようだった。

最後に口を利いたのは、昨夜。

《ご飯食べないの？》

《いらない》

よりによって最期の会話がこんなのって……。

萠黄は瞬きもせずに母の輪郭を目でなぞった。

口うるさくて、がさつで、うざったい母。

でも突然こんなふうに死んでしまうなんて。

――ズルい。

無性に腹が立つ。でもこの怒りは母に対してじゃなく、自分に対して。自分がもっとおとなだったら、母はいい思い出を抱いて天国に行くことができただろうに。

「そろそろ、ええかな」

警部に促されてゆっくり腰を上げた萠黄は、わずかにバランスを失って床にトンと膝を打ちつけた。

アッという小さな悲鳴が漏れた。

見ている前で、母の右の耳たぶが付け根からこそげ落ちたのだ。耳たぶはフローリングの床の上に落下すると、粉々に砕け散った。

そのとたん萠黄の涙腺は決壊し、とめどもなく涙があふれ出した。

医師があわてて母を布で覆い隠した。しかし、母の頬に走った一本のひび割れがしっかりと目に焼き付いてしまった。

あとはもう何も見えなかった。

泣き疲れた萠黄を、警部はつとめて優しく介抱した。日々仕事に明け暮れ、ろくに団欒を共にできない一人娘を思いだしたのかもしれない。

「当面必要な服だとか、身の回りのものだけ持ってくれるかな。足りないものがあったら、あとで婦人警官に取りに寄越すから」

泣き腫らした目も乾かないうちに、萠黄は自分の部屋で身支度を整えさせられた。
下着にタオルに文房具に。旅行用のリュックにあわただしく詰めていく。
「も〜〜え〜〜」
だしぬけに、床を這うような低い声がした。
「モジ？」
今の今まで彼のことはすっかり忘れていた。携帯電話は布団の下で、薄情な持ち主を非難するようにチカチカ光っていた。
「ごめんな」
モジはいつもより一回り小さな姿で、画面の隅に丸くなっていた。
「……どうしたん？」
コッコッ。部屋のドアが外からノックされた。
「萠黄さん、そろそろ行きますよ」と警部の声。
「判りました」と返事し「また後でね」とモジに言うと携帯を二つに折って、リュックのサイドポケットに放り込んだ。
玄関を出たところで両側から屈強な警官ふたりにはさまれた。我々が署までお守りしますと、四角ばった口調でつばを飛ばす彼らに、お願いしますと頭を下げた。
エレベータで降りた一階ロビーには十数人のマスコミ

取材陣が待ちかまえていて、ある者はカメラを向け、ある者はマイクを差し出しながら萠黄に駆け寄ってきた。
「無差別爆破テロと聞きましたが本当ですか？」
「死者数人との噂がありますが、生物兵器ですか？」
「若者が集まって集団ガス自殺を図ったとか？」
てんでバラバラ。憶測や流言が勝手に一人歩きしている。そんな彼らの目に、警官に固められて現れた少女の姿はどう映ったか。
「あ、あなたが犯人ですか？」
「集団自殺の生き残りですかー？」
ライトが光る、フラッシュがバシバシたかれる。
「くそ、救急隊員や警察はどこも人手不足やのに、マスコミの連中はどこからこんだけ湧いてきよるんや」
警部は悪態をつきながら突き進む。ふたりの警官に守られた萠黄がすぐ後ろからついていく。
「萠黄！」
誰かが萠黄の手首をつかんだ。ハッと目を向けると、親友の顔がすぐそばにあった。
「むん！」
「バイト先のテレビニュースで見たよ。大変やったね」
その言葉を聞いて、萠黄はようやく救われた思いがした。

8

再会もつかの間、人混みにもまれて、ふたりは引き離されていく。
「萠黄、どこ行くん？」
「警察しょ！」
「ま、まさか容疑者!?」
「違うー。わたし被害者」
「判った。あとから行くわ」
むんの姿は、アッという間にマスコミ連中の波間に消えた。
先導する警部は、地下駐車場に続く裏口から萠黄を連れ出した。駐車場出入口のスロープでは、パトカーがエンジンをかけて待機していた。
いかつい二人組警官にはさまれて後部座席に乗り込むと、パトカーはすぐに走り出し、スロープを登り切ると左折して、全速力で走り出した。
「すぐそこの西奈良署までやから」
〝右側〟の助手席から警部が振り返って言った。パトカーはもちろん国産車である。萠黄はコクンとうなずくと、大きなリュックを膝に抱えたまま、車窓に目をやった。その目が路肩に止まっていたベンツを認めた。運転席であくびをしている柳瀬の向こうに、こちらを指さす

揣摩太郎のサングラス顔があった。
「ごめんなさい……。ここまで乗せてきてもらったのに、お礼も言えなかった」
萠黄はリュックに顔を埋めた。

むんは警察署に向かって歩き出した。幸いにもマスコミは誰もむんに気づかず、あわててパトカーの後を追っていった。
このあたりの地形は起伏に富んでいる。警察署までは、上って下ってまた上る、二十分くらいの道のりである。
空は今にも雨が降ってきそうな気配。
「キミぃ」
ふいに道路から男の声がした。首を向けると、ベンツの窓からサングラスがこちらを見ている。
「誰？」とむん。
「俺だよ」
男はサングラスを外すと、にこっと微笑んだ。
「だから、ダレ？」
男はあわてたようだった。
「お……俺、揣摩太郎なんだけど」
むんは無視して、さっさと歩き始めた。
「待ってくれ！……オイ柳瀬、車を止めろ」
揣摩は車を降りると追いかけてきた。

「キミって光嶋萠黄さんの友だちだろー？」
むんは再び足を止めた。ヘリコプターが上空を轟音を響かせて飛んでいく。機影を見上げながら揣摩は、
「こんなところで立ち話もなんだから、車に乗ってよ」
通りすがりの主婦数名が、ちょっとあの人と違う？まさかこんなところに、とひそひそ話している。
「あなたが勝手に話してるんですけど。……どうして萠黄を知ってるの？」
「大学からこの車で彼女を乗せて来たんだ。俺も今日からK大学に入学したんでね」
「同じ大学……？」
むんは態度を少しやわらげだ。
シマタロウ、シマタロウ、聞いたことがある。確か萠黄の口から……誰やったっけ。
「それで俺が彼女といっしょに家に入ったら、お母さんが大怪我をしてて――」
むんの肩からバッグが滑り落ちた。
「ウソ――」
「本当だよ。……ついさっき亡くなったらしいけど」
むんは絶句したまま、萠黄のマンションに目をやった。テレビニュースで見た煙は、完全に消えていた。
「これからパトカーを追いかけようと思ってるんだ。よかったらキミもどうかなと――」

「乗せて！」
むんはつかつかとベンツに歩み寄り、後部ドアを開くや、ヒラリと飛び乗った。
「追いかけよ、急いで」
揣摩は垂れる前髪をかき上げながら、助手席に戻った。
関西の女性ってホントにせっかちだな――。
「それで俺のこと、本当に知らない？」

パトカーは赤信号で停止した。交差点を左折――この世界では右折――して、そのまま直進したら、警察署は目の前だ。
後部座席で恰幅のいい警官ふたりにはさまれた萠黄は、空調の冷気も届かず、息苦しさをじっと我慢していた。せめて窓を開けて走ってくれればいいのに。
「うるさいハエどもや」
ヘリコプターのことを言ってるらしい。警部の肩越し、フロントガラスの向こうに、いま一機のヘリがこちらに近づいてくるのが見えた。そうまでしてパトカーの中を撮影したいのか。
「ん？」
ヘリはどんどん高度を下げてくる。そして警部が首を傾げた、そのとき――。
横腹を見せたヘリの上で、黒い迷彩服を着た男が、肩

の上に太い筒状のものを構えるのが見えた。
バズーカ砲!?
「なんだありゃ！」
警部が叫んだときには、すでに発射された弾丸がパトカーめがけて近づきつつあった。
着弾。激しい炸裂音。
大きな衝撃に襲われた萠黄の身体はぐるんと回転した。

9

ズーーーン。
「何の音だ？」
閑静な住宅地に似あわない地響きのような音。
揣摩は身を乗り出すと音の源を探した。その肩をハンドルから離した柳瀬の手がつついた。
「タロちゃん、あそこ」
柳瀬は渋滞する車の列のずっと前方を指さしていた。
揣摩の目に黒煙と、赤く光るものが見えた。
「パトランプじゃないの」
「それってパトカーの上で光ってるヤツか。まさかさっきの音――」
「あのへん走ってるパトカーって、萠黄を乗せてるのと違(ちゃ)うの！」むんが叫んだ。

崩黄は上も下も判らなくなって重力の感覚を失った。
と、直後、車体は地面に叩きつけられ、頭や背中をいやというほど天井に打ちつけた。それでも左右をサンドイッチしていた警官たちが緩衝材の役割を果たしてくれたため、怪我をしないで済んだ。
身を起こしすと車内は地獄絵図だった。運転手は座席ごと姿が見えず、助手席の警部はわずかに首を振りながら何ごとかつぶやいている。左隣にいた警官は大きな身体をくの字に曲げており、首が異常なほどねじ曲がっている。ヒッと叫んで後じさると、背中にいたもうひとりの警官の吐いた血が崩黄の手にかかった。
絶叫が心の底から湧き上がったが、痰(たん)が絡んで声にならない。
「崩黄さん……無事か？」
警部のたどたどしい声に崩黄は思わずヘッドレストに顔を寄せた。
「バズーカで攻撃って狂ぅとんで。ここは日本やぞ」
警部は首をねじると弱々しい眼差しを崩黄に向けた。
「早よ逃げろ。アイツらが来よる」
警部が顎を動かしたので外を見ると、ヘリコプターから垂れたロープを滑り降りてくる迷彩服が目に入った。彼らは手に手に武器のようなものを持っていた。

「アンタを狙ぉとるんや。急げ、私がヤツらをくい止めるから」
「警部さんもいっしょに逃げよう」
「無理や。足が挟まれて動かれへんのや」
ひしゃげた車体が警部の足に噛みついていた。おそらくひどい痛みなのだろう。引き抜こうとするたびに顔をしかめる。
「窓から這い出ろ。急がんと殺されるぞ」
（殺される――）
「誰か呼んできますから、待ってて」
萠黄は、すでに事切れている警官の巨体を押しのけ、歪んだドアを手で押し広げると、道路の上に転がり出た。
潰れたパトカーは車道を塞ぐように横向きになっていた。後続の車はせき止められたまま、長蛇の列をなしている。しかしヘリによる攻撃に恐れをなし、ある者は車を乗り捨てて逃げ、ある者はUターンするつもりが、あわてて歩道に乗り上げ、そのまま壁にぶつかったりしていた。
（逃げるって、どこへ）
足に自信のない萠黄は、その場で立ちすくんでしまった。すると彼女の優柔不断をあざ笑うように、無機質な足音がタッタッと近づいてきた。身の危険を感じた萠黄は、考えるより先に身体が動いて、歩道脇の茂みに頭か

ら飛び込んだ。
幸運だったのは、パトカーの上げる煙が彼女の動きを隠してくれたことだ。茂みの中で息を殺していると、足音がいくつも近づいてきた。
「いないぞ」
「逃げやがったな。探せ！」
萠黄はようやく〝敵〟の姿を間近で見た。
日本人のようだが、まるで外国で戦争するような迷彩服にマシンガンを持ち、顔にまで迷彩を施している。
（このひとたちが母の命を奪った……）
ダーン。
突然、銃声が轟いた。迷彩服のひとりが「グァッ」と叫ぶと道路の上に倒れた。
ダーン。さらに銃声が響く。警部が撃っているのだ。
「くそっ。コイツ生きてるぞ！」
迷彩服たちがマシンガンを構えなおした。
ガガガガッ。
萠黄は耳を両手で覆った。
（なんなのコレは）
昨日まで生きていた母が死に、さっきまでそばにいた警部が今また――。
（こんなの違う。わたしのいる世界じゃない。昨日までのありふれた日常に帰して！）

萠黄は茂みの中でひたすら小さくなっていた。心の中は膨れていく怒りと悲しみでいっぱいにしながら。
迷彩服はやがて駆け去った。
閑静な住宅地は、もとの静けさを取り戻したようだが、空にはまだヘリコプターの音が。
「萠黄」
いきなり耳のそばで声がしたので、萠黄は心臓が爆発するかと思った。声の主は彼女の親友だった。
「むん」
「無事やったんやね。良かったー」
ふたりは手を取り合って喜んだ。むんの後ろには揣摩の顔もあった。
「萠黄さん、怪我はない？」
「ハイ、ちょっと擦りむいた程度です」
むんは親指で揣摩を指さすと、
「このお兄さんが萠黄を大学から連れてきてくれたってホンマ？」
「ホンマよ……もしかして、むんは揣摩さん知らん？」
「だってわたし休学中やん」
「そやのぉて。わたしの部屋に貼ってあるポスター、あれが揣摩さんよ」
むんはこれ以上ないほど丸い目をして揣摩をかえりみた。

「アンタ、芸能人やったん？」
すると揣摩は胸を張って、
「グループ〝ダ・ヴィンチ〟の揣摩太郎とは俺のこと」
おそらくは萠黄の恐怖心を取り除こうと、わざとおどけた口調で言ったのだろう。しかしむんにはさほど効果はなく「ふーん」と言ったきりだった。揣摩は当てが外れて、がっくり肩を落とした。
「ごめんね揣摩さん。むんはテレビ見やん人やから」
その時またヘリコプターの近づいてくる音がした。
三人の表情がこわばった。
「萠黄さん。道路に落ちてたよ」
揣摩が萠黄のリュックを差し出した。礼を言って受け取った萠黄は、
「どうしたらええんやろ」
すると揣摩が空を見上げながら、
「逃げよう。警察も頼りにならないし」
「ウン、ここでグズグズしてたら危ないわ」とむん。
萠黄もうなずいた。そして依然煙をあげているパトカーを振り返ると、両手を合わせて拝んだ。
（警部さんありがとう。あなたのことは一生忘れません）
三人は目立たないよう、住宅の間を縫って低い方へと降りていった。その後ろ姿を少し離れたマンションの屋

上から、じっと双眼鏡で見ている人影があった。
人影は武器を持っているわけでもなく、着ているものは灰色のTシャツにグレーのジーンズという、いたってありふれたものだった。
やがて人影は、三人の行方を確認するとすばやく立ち上がり、急いでマンションの階段へと向かった。

《第四章につづく》